

模擬講義を中心とした海外リクルーティング

国際教育交流センター教育交流部門

伊 東 章 子

1. はじめに一教育交流部門による海外リクルーティング実施までの経緯

名古屋大学は昨年、国際競争力の強化に取り組むトップグローバル大学に選出された。その構想調書では2020年までに留学生の受け入れ数を3000名に増やすことを明記している。これを受けて全学的なリクルーティング活動の見直しが進み、教育交流部門においても各部局の現状を踏まえた様々な方策が論じられた。この議論から生まれたのが、本学協定校を訪問し、模擬講義を提供することで本学の教育・研究をアピールし、留学生の獲得を目指すという新しいリクルーティングの取り組みである。本報告ではプロジェクトの概要を振り返るとともに、この経験を通じて得られた知験を全学的なリクルーティングに対する提言としてまとめる。

教育交流部門でリクルーティングを実施するにあたり、次の二点が論点となった。一つは中国のテコ入れである。言うまでもなく本学留学生の半数を中国人留学生が占めている。近年は本学においてもASEAN諸国からの留学生が増加しているが、その一方で中国人留学生は年々微減している。今後も中国人留学生の減少傾向が続いてしまうと、いくら新興国からの留学生が増えても、留学生総数としては伸び悩みかねない。やはり本学が質量ともに安定した留学生を獲得するためには、中国に重点が置かれるべきであり、その上で新興国へも目配せすべきである。

二つ目は大学院リクルーティングの強化である。本学には留学生のリクルーティングを担う国際教育交流センター留学生受入部門があるが、G30を中心とした学部生を主な対象としており、大学院については事実上各部局の努力に任されている。しかし本学留学生の大多数は大学院生である。全学的な手立てが薄い大学院リクルーティングの強化が、留学生受け入れ数全体を大きく左右するのは明らかである。

以上のことから、教育交流部門では平成26年度のリクルーティングをインドネシアと中国の協定校で実施することとした。学部ではなく大学院リクルーティングを目的とするため、訪問先校の学部学生を対象に大学院講義を模擬形式で行い、その後本学への留学説明会を開催する形式をとった。模擬講義に参加してもらい、大学院の専門教育の面白さや自分自身の専門分野を極めることの大切さを参加者に伝え、まずは大学院で学びたいという進学意欲を高めることが狙いである。多くの参加者が関心を持ってもらえるよう、講義は人文学、社会科学、工学、理学などの幅広い分野カバーした。さらには本学大学院の充実したカリキュラムや留学生の教育環境の整備を進学説明会でアピールした。併せて協定校関係者と直接意見交換を行える貴重な機会を活かし、日本留学事情についての聞き取りや、今後の協定校との関係強化についても協議した。

2. インドネシアにおける活動報告 (2014年12月8日～12月12日)

インドネシアにおける日本語学習者数は近年急増しており、国際交流基金の調査によると中国に次いで世界第2位となっている。経済発展が著しく、日本企業も多数進出していることから、今後日本へ留学を希望する学生の増加が見込まれている。模擬講義の実施を通じてインドネシアの協定校と連携を深め、日本留学に関心のある学生に働きかけることは、本学の留学生受入にとって大きな効果が期待できると判断した。

インドネシアには本学の全学間協定校および部局間協定校が11校存在するが、今回は広いインドネシアでの移動を考えて、1) パンドン工科大学(全学間)、2) パジャジャラン大学(文学部部局間)、3) インドネシア大学(工学部部局間)、4) ガジャマダ大学(全学間)の4校を訪問することにした。各大学において毎回2名が模擬講義(30分)を行い、続いて留学説明

会を実施した。模擬講義担当者として、教育交流部門から伊東章子（国際言語文化研究科）、レレイト・エマニュエル（工学研究科）、浅川晃弘（国際開発研究科）、西山聖久（工学研究科）の4名が参加した。

1) バンドン工科大学 International Relation Office

【講義の概要】

Noshiyama, 'Technologies in Assembly Line: A method for Effective Team Operation'

Leleito, 'Technological Innovations in Disaster Management: Lessons from Japan'

進学説明会

バンドン工科大学はインドネシアで最も長い歴史を持つ大学の一つであり、理工系ではトップ大学である。模擬講義の実施案を同大 International Relation Office に打診したところ、受入れ快諾の返事があった。本学とはNUPACEやNUSIPなどを通じて着実に学生交流が続いているため、本学との交流事業にも積極的に応じてくれた。

模擬講義には工学部を中心に日本留学に関心のある学生や教員などが幅広く参加した。会場の関係で参加者は50名程度に限られたが、会場に入りきれず、やむなく講義に参加せず帰る学生も多かった。また参加した学生の中には、開始1時間以上前から座席の確保のために並んでくれた学生もいた。同大学の学生の間で名古屋大学および日本留学への関心が非常に高いことがうかがえた。

講義は日系製造業企業のインドネシアへの進出が盛んなこと、また同国では日本と同様に災害研究への関心が高いことを踏まえ、製造業における品質管理（西山）、防災研究（レレイト）に関する講義を選択した。どちらもインドネシアの現状に相応しい講義内容だったため、質疑応答が積極的に行われた。特に同大で地震と火山防災に置ける早期警戒システムの研究を行っている学生とは本学で同じテーマを手がける学生たちとの共同研究の可能性も持ちあがった。引き継ぎ、来年度の学術交流実現に向けて帰国後も議論を続けることになった。

2) パジャジャラン大学人文科学部日本語学科

【講義の概要】

浅川「グローバル化と国際人口移動」

伊東「近代日本における技術発展と文化の変容」
進学説明会

同大学日本語専攻の学生数は全学年合わせて300人ほどで、専任教員（日本語教師を含む）は約20人ほどである。同大学人文科学部は本学文学部・文学研究科の部局間協定校であり、長らく実質的な交流関係が続けられている。過去にパジャジャラン大学から本学に留学し、卒業後パジャジャラン大学で教員になった卒業生も複数いる。

模擬講義には約70名の学生及び教員が参加し、大変盛況だった。特に模擬講義の内容が社会科学研究や技術史研究など、同学科のカリキュラムにはない内容だったのが喜ばれた。参加教員からは「学生が普段接していない学問分野を紹介してもらえ、日本に対する知識や関心が一段と深まった」と評価してもらえた。

同学科の教員は在籍生に留学を積極的に勧めており、国費大使館推薦や日本語日本文化研修への応募などを指導しているとのことだった。これは同学科の中心となるのが日本人教員や日本で学位を取得した教員であるため、日本留学の価値や重要性を強く認識していることに起因している。実際、模擬講義に参加した学生の中には、本学大学院へ進学希望の者や、NUPACEへ応募予定の者がいた。選考結果によっては本学への留学が見込まれる。この他にも日本へ留学を希望する学生は多かったが、やはり留学を実現するためには奨学金が不可欠だと言う学生がほとんどだった。

また、現在インドネシアでは大学改革が押し進められていて、大学教員になるためには修士以上の学位獲得が必須となっている。そのため現在大学教員として働いている修士号や博士号を持たない者が、日本を含む諸外国の大学院へ留学するケースが増加しているという。実際同学科の教員20名のうち3名が日本留学中だった。そのため大学院への留学に関しては、学部学生ばかりではなく教員の間でも関心が高いことが分かった。

3) インドネシア大学情報科学部

【講義の概要】

Noshiyama, Leleito, 進学説明会

インドネシア大学はガジャマダ大学、バンドン工科

大学と並んでインドネシアの三大有力大学である。インドネシア大学の複数の学部が本学部局と部局間協定を締結している。今回の模擬講義は本学工学研究科の卒業生である Jatmiko 准教授が受け入れ準備を進めてくれた。模擬講義の内容については、バンドン工科大学と同様の理由により、製造業における品質管理、防災に関する内容とした。模擬講義は同学部が毎週水曜日に外部講師を招いて実施しているセミナーの枠を利用して行われた。

模擬講義には同学部学生と教員約30名が参加した。参加学生の中には日本留学を希望する者も、また既に学部の時に日本に留学している者も多く、留学手続きなどについて具体的な質問が相次いだ。参加した学生に尋ねたところ、インドネシア大学の学生に人気のある留学先はアメリカ、オーストラリア、次いで日本とのことだった。しかし近年は留学ではなく、同大大学院へ進学する学生も多くなっているようである。

4) ガジャマダ大学文化研究学部日本語学科

【講義の概要】

浅川、伊東、進学説明会

ガジャマダ大学はトップ校の一つで、本学の全学間協定校である。現在本学大学院に留学中のガジャマダ大学日本語学科出身者もいる。同学科の学生規模は全学年合わせて300人ほどである。専任教員（日本語教師を含む）は20人ほどで、やはりトップ校であるためか、教員全員が修士号以上を取得していた。また日本で学位を取得した教員も多く、その影響もあってか学生の間でも日本での大学院進学を志す者が多いようである。この例から考えても、やはり教員の日本留学に対する意識が、在籍生の留学需要の喚起に影響を及ぼすことが明らかである。

模擬講義には約40名の学生及び教員が大変熱心に参加した。特に質疑応答では、同学科の学生が発展途上国の教育や環境問題など多様な学問分野に関心を持っていることがうかがえた。これらは現在のインドネシアの日本関連学科では学ぶことのできない学問領域であり、このような学生は日本へ留学し、より専門性の高い勉強をしたいという希望を強く持っている。今後このような幅広い分野の模擬講義を提供し、日本の大学院で専門的に学びたいという気持ちを喚起させることが重要である。

模擬講義や進学説明会での質疑応答にみる学生の日本語能力は非常に高かった。研究生として今すぐ来日しても十分な日本語能力であった。既に日本の大学に交換留学経験のある者も複数おり、その全員が日本の大学院へ進学を希望していた。インドネシアではまずは短期留学（本学で言うならばNUPACEやNUSTEP）などで一度日本留学を経験して日本語能力を磨き、その後大学院などへの正規留学するケースが多いようである。

3. 中国における活動報告

(2015年3月16日～3月19日)

インドネシアに引き続き、中国・東北三省の協定校においても模擬講義形式のリクルーティングを実施した。広い中国全土においても、東北三省は伝統的に日本への留学生を数多く送り出してきた。実際本学においても東北部出身者が大勢学んでいる。このことから今回の訪問地を東北三省に定めた。現在中国には本学の全学間協定校が15校あり(含む香港)、そのいずれもが中国における有力校である。しかしその一方で、協定校出身者が本学大学院に進学するケースは非常に少ない。本学としては協定校との関係強化を図り、協定校から本学への進学者を増やすことが、中国におけるリクルート戦略上喫緊の課題となると考えた。

東北三省における協定校として1) ハルビン工業大学(全学間)、2) 吉林北大学(全学間)、3) 東北大学(全学間)、4) 大連理工大学(現在のところ協定未結)を訪れた。各校において文系、理系に分かれて模擬講義と進学説明会を実施した。本学中国交流センターと協議し、模擬講義を「名大巡講」と名付けて事前周知活動を実施した。模擬講義担当者として、教育交流部門から伊東章子(国際言語文化研究科)、曾剛(工学研究科)、浅川晃弘(国際開発研究科)、檜枝光憲(理学研究科)の4名が参加した。

1) ハルビン工業大学国際合作処

【講義の概要：文系】

浅川「グローバル化と国際人口移動」

伊東「近代日本における技術発展と文化の変容」
進学説明会

【講義の概要：理系】

Zeng, 'Automotive Embedded Computing Systems'
Hieda, 'Low Temperature Physics and its Application'

進学説明会

ハルビン工業大学はいわゆるC9の一つで、特に宇宙工学やロボット工学で中国トップの研究実績を誇る。「工業大学」の名前の通り理工系が中心ではあるが、社会科学、人文科学を含む総合大学である。大学の国際化の一環として、昨年夏学期を導入し、3学期制に移行した。これは夏学期を活用して学部学生の海外派遣を促進させるためだという。

文系、理系ともに模擬講義は国際合作処が学内周知してくれ、講義に関心のある学生が集まった。文系の会場には日本語学科の学生や教員、独学で日本語を学ぶ学生など約60名が集まり、大変盛況だった。日本からわざわざ講師が来るということで、とにかく日本語を学習している者が集まってきた。そのため、日本語能力としては初学者からN1レベルとバラバラだった。模擬講義の内容は予め同大学の日本語学科のカリキュラムでは扱われない、学生にとって新鮮な学問分野からテーマを選定した。

参加した日本語学科の教員の一人からは、日本から講師が来てくれて直接話を聞く機会があると、学生の日本語学習意欲は一段と高まるという感想が寄せられた。ハルビン工業大学に限らず、今中国の多くの日本語学科が学生の確保に悩んでいる。中国の日本語教育全体を活気づけるためにも、このような模擬講義を中国各地で継続することは大きな意義があると思われる。

講義参加者のほとんどが日本留学に強い関心があり、進学説明会でもこちらの説明に熱心に耳を傾けていた。独学で日本語を学ぶ者や、短期語学研修などで一度日本に留学した経験のある学生から日本の大学院に進学したいという相談が寄せられた。

理系の模擬講義も国際合作処が周知してくれて、講義内容に関心のある学生30名ほどが集まった。参加者の所属や専攻はまちまちで、講義タイトルに関心を持った学生が自発的に集まってきた。純粹に講義に関心があって集まってくれたので、講義に対する反応は大変良く、質疑応答なども積極的に行われた。その反面、講義参加者は特に日本留学に関心があるわけでは

ないようだった。事実、講義には関心を持って参加していても、その後の進学説明会ではさほど大きな反応を示さない参加者が多かった。これには理系分野の専攻であっても、日本語を理解している学生は同時刻に行われた日本語による文系科目の模擬講義に参加していたことも影響していたようである。

また本学に対する関心も高くなく、講義に参加して始めて名古屋大学のことを知ったという学生もいた。このような学生の中には模擬講義への参加を通じ、もっと名古屋大学について知りたいと思ったと感想を話してくれる者もいた。

2) 吉林大学外国語学院日本語学科, 計算機学院, 物理学院

【文系講義の概要：外国語学院日本語学科】

浅川, 伊東, 進学説明会

【理系講義の概要】

Zeng (計算機学院), Hieda (物理学院), 進学説明会

吉林大学は中国で最も大きな総合大学であり、重点大学の一つである。本学は吉林大学と1985年と早くから全学間協定を結んでいる。本学出身で吉林大学の教員となった者、また逆に吉林大学出身者で本学教員になった者もあり、重点的な交流関係が持続する協定校の一つである（吉林大学はACメンバー校の一つでもある）。

文系の模擬講義は外国語学院日本語学科主催の講演会として行われた。会場には同学科3年生と大学院生の合計70名が参加した。参加者全員がN1を取得済みで、模擬講義での質疑応答も日本語で大変スムーズに行われた。多くの学生が今すぐ日本の大学院へ進学できるだけの日本語能力を保持していた。

同学科教員によると、学部学生の約4割が日本に留学経験があるという。近年の学生の傾向として2年次もしくは3年次に短期プログラムや交換留学に参加することが多いとのことだった。日本の大学院に進学する学生の多くが、初めて留学した大学の大学院へ進学を希望するという。大学院進学を考えていなかった学生が、日本に短期留学したのをきっかけに大学院進学を真剣に志すようになることもあるようである。実際に日本に留学経験のある学部生に尋ねたところ、ほぼ全員が「大学院に進学してまた日本に留学したい」と

いう希望を持っていた。特に3年生は大学院進学を意識し出す時期でもあるので、模擬講義後の進学説明会では特に大学院入試や研究生の応募の手続きについての質問が続いた。

理系講義については、吉林大学から専門性の近い学生に向けて講義をしてもらいたいという要望があったため、計算機学院（曾）および物理学院（檜枝）で講義を開催した。午後の授業がまだ行われている時間帯であったが、両会場合わせて60名の学生が参加した。専門分野が近い学生を対象にそれぞれ講義を行ったため、どちらの会場においても学生の反応は非常に良く、熱心に講義を聴いてくれた。

その反面、講義の内容に魅かれて参加した学生が多いため、必ずしも日本留学に関心のある学生ばかりではなかった。留学について関心があるか尋ねてみたところ、関心があると答えた学生の多くは、欧米圏の大学を志望していた。日本留学への関心が低いせいもあり、本学の知名度もあまり高くはなかった。講義に参加して初めて名古屋大学を知った学生も多かった。そのような学生の中には、講義を通じて本学に関心を持ってくれたり、また講義後に留学先として日本も検討に加えると答えてくれたりする学生もいた。

3) 東北大学外国語学院日本語学科、情報学院

【文系講義の概要：外国語学院日本語学科】

浅川、伊東、進学説明会

【理系講義の概要：情報学院】

Zeng, Hieda, 進学説明会

東北大学も重点大学の一つである。総合大学であるが、歴史的に理工系が強いと言われている。訪問当時の東北大学学長は本学卒業生であり、この他にも本学で学び、東北大学で教員をしている者も多い。また東北大学は毎年NUPACEなどを通じて、積極的に学生を本学へ派遣している数少ない中国の協定校である。

文系の模擬講義は外国語学院日本語学科にて行われた。会場には同学科3年生と4年生の合計50名が参加した（他学年は授業中のため不参加）。参加者全員がN1を取得済みだった。同学科には現在日本人教員が在籍しておらず、そのため参加者にとっては、日本人による専門分野の講義を聞くのは貴重な体験だったようである。また移民問題や技術史という、同学科の

カリキュラムでは取り扱われない分野の講義だったので、学生は大いに関心をもったようだった。講義後の質疑応答でも、講義内容について積極的な質問がなされた。中には大学院授業で議論できるような問題提起を行う学生もいた。今回行った文系の模擬講義では最も活発な講義となった。

同学科教員によると、在籍生の3、4割が短期留学などで日本に留学経験があるという。また学部生の中で大学院進学を希望する者は毎年2割前後で、東北大学で院進を希望する学生（通訳・翻訳希望）と日本の大学院へ進学を希望する学生（それ以外の研究分野）が半々だそうである。日本の大学院へ進学する学生たちは情報収集に苦労していて、教員としても最新の情報についてはなかなかアドバイスをしにくいとのことだった。そのため模擬講義後の進学説明会でも、自分に相応しい研究科はどこか、指導教員はどう探したら良いのか、などの大学院進学を意識した詳細な質問が多く挙げられた。

理系の模擬講義は情報学館で行われた。午後の授業が集中する時間帯での開催だったにも関わらず、様々な専攻の学生が90名ほど集まり、大きい会議室がほぼ満席となった。どの学生にとっても海外から来る講師の講義を聴くのは貴重な機会のように、熱心に講義に耳を傾けていた。また英語によるインタラクティブな授業に強い関心があるようで、講義の最中から積極的に議論に参加して、英語で自分の意見を述べる学生が多かった。

それまで訪問したハルピン工業大学と吉林大学とは異なり、東北大学における名古屋大学の知名度は非常に高く、また日本留学を強く希望する学生が多かった。そのため講義終了後の進学説明会でも、日本留学に関して質問が相次いだ。残念ながら本学の模擬講義終了後、同じ会場でドイツの大学による説明会が予定されていたため、すぐ会場を後にしなければならなかったが、その後も外の廊下で30分以上学生からの質問に答えた。どの学生からも日本留学に対する熱い思いを感じた。質問の多くは出願手続きの詳細についてであり、既に日本留学を計画しているように思われた。

ちなみに東北大学国際交流担当者によると、最近では上述のドイツの大学のように海外から多くの大学がやってきて留学説明会を開催しているという。しかし似たような説明会が頻繁に開催されるので、学生は

徐々に関心を失っているそうである。その点、模擬講義のような試みは同大学にとっても初めてのことで、単なる留学説明会と異なり学生に国際的な研究を知る貴重な機会になると歓迎してくれた。

4) 大連理工大学電子情報工程学院, 物理学院

【講義の概要】

Zeng (電子情報工程学院), Hieda (物理学院), 進学説明会

大連理工大学は中国の985校の一つである。今回訪問した4大学のうち、大連理工大学だけは本学の協定校ではない。野依良治特別教授が大連理工大学の名誉教授を務めており、また中国交流センターを通じた学術交流の実績もあるものの、協定締結には至っていない。これまで本学では工学研究科や情報科学研究科、国際言語文化研究科などに受入れ実績がある。

同大学のある大連市には多くの日本企業が進出し、日本語や日本事情に通じた人材育成のニーズが高い。そのため日本語や日本関連教育にとっても力を入れている(金属材料学部のように日本語強化クラスを設けているところもある)。また立命館大学との共同学部「大連理工大学-立命館大学国際情報ソフトウェア学部」を2014年に開講するなど、日本の大学との国際連携も進んでいる。

大連理工大学においても、せっかくの機会なので講義内容にあった学生に講義を受けさせたいという要望があり、電子情報工程学院(曾)および物理学院(檜枝)に分かれて講義を開催した。英語での講義だったため、大連理工大学側の判断で日本語強化クラスの学生は講義へは招かれず、英語強化クラスから学生50名が参加した(本学としては日本語強化クラスの学生にも参加してもらいたかったので、この点は非常に残念だった)。

ここでも講義に対する学生の反応は非常に良かった。やはり英語強化クラスということで、学生の英語力が高く、質問やディスカッションに積極的に参加していた。その一方で、残念ながら名古屋大学はあまり知られていなかった。しかし講義を通じて名古屋大学に関心を持つようになってくれた参加者もいた。さらに進学説明会で青色LED研究とそのノーベル賞受賞について触れると、学生たちから驚きの声があがった。やはりノーベル賞受賞者が多いということで、本

学の研究水準の高さを理解してもらえたようである。

英語強化クラス学生の日本留学希望者は多くなかった。やはり留学するなら欧米圏へという学生が多かった。しかしその一方で、漠然と欧米圏へ憧れている学生たちもおり、そのような学生の中には今回の模擬講義への参加を通じて、日本も留学先の選択肢に加えてくれた者もいた。そもそも留学したい、大学院に進学したいという意欲は持ち合わせているので、教育環境や研究実績などを含めて、細やかな留学情報を提供することで、欧米諸国から本学へと関心を転換させることも可能だろう。

4. 今後の全学リクルーティングに向けた提案

最後にインドネシアおよび中国での活動を踏まえ、今後の全学大学院リクルーティングに向けた提案をまとめたい。

1) インドネシアと中国の協定校において模擬講義は大きな歓迎を受けた。これは訪問目的を「リクルーティング」や「留学説明会」などとせず、学術交流として申し入れたことに起因していると考えられる。中国・東北大学の例が示すように、世界各国の大学が留学生の獲得に乗り出し、現地での留学説明会を頻繁に開催している。そのような中で差異化を図るためには、模擬講義のように学術交流としてのアプローチが有効である。これは決して学術交流を隠れ蓑としてリクルーティングを実施するというのではなく、模擬講義を通じ多くの学生や教員、国際交流担当者と直接対話する機会を持ち、協定校との関係を強化することが、留学生獲得のための確実な一歩となることを意味している。

2) 過去の数々の調査により、留学志願者は留学校の選択にあたり、指導教員や留学アドバイザーの意見を重視する傾向が強いことが分かっている。このことからまずは教員の間で留学先候補としての名古屋大学の認識を高めることが重要である。今回の模擬講義のような学術交流の場は、学生のみならず教員に対しても総合研究大学である本学の幅広い教育・研究の一端を紹介する優れた機会となる。また模擬講義の内容に関心を持った教員が、今後本学との継続的な研究交流を望むケースもある(バンドン工科大学の防災研究

チームや吉林大学自動車工学プログラム)。このように本学と訪問校との研究協力が進展すれば、そこから波状的に本学への留学志願者が増えることが十分期待できる。

3) インドネシアの例にもあるように、現在 ASEAN 諸国では大学改革が進んでいる。これを受け、今後しばらくの間は大学教員の間で海外の大学院への留学志向が強まることが予想される。上記2)とも関連するが、教員が留学経験を有する場合、指導生を自分の母校へ留学させようとする傾向が強い。そのため、既に教員として働く者を学位取得のために本学に迎えることは、長期的視野に立てば留学生獲得の有効な道筋となるはずである。教職に就く者の受入れ強化策（入試条件の緩和や入学後宿舍の提供など）を全学で議論すべきである。

4) インドネシアと中国両国において短期留学プログラム参加経験者が、数年後に同じ大学の大学院へ進学を希望する傾向がはっきりと認められた。特に中国吉林大学と東北大学の日本語学科では在籍生の約3～4割が学部生のうちに長短含めて日本留学を経験して

いた。この事実に着目し、本学としても NUPACE や NUSTEP をはじめとする短期プログラムの受け皿を拡充し、さらにはプログラム参加者をその後の大学院進学へと繋ぐ道筋を早急に確立しなくてはならない。

5) これまで中国で学部を終えた学生が日本の大学院へ留学を希望する場合は、まずは研究生として来日し、大学院試験に向けた勉強を行うのが暗黙のルールとなっていた。しかしこの「まずは研究生で」という流れは今や着実に変わろうとしている。日本の多くの大学が、中国での現地入試や遠隔地入試を実施し、中国人留学生の大学院直接受験の機会を広げているからである。そして直接入試の機会が増えるにつれ、中国人学生とその保護者の間で、研究生期間を「学費と時間の無駄」と見なす風潮が広まりつつあることが、今回の協定校教員との意見交換で指摘された。研究生制度の在り方も含め、中国人学生の直接入試の機会について調査・検討を始める時期に来ていると思われる（この点については今年度教育交流部門に「研究生制度・大学院入試」ワーキンググループを設け、様々な可能性を検討することにした）。